



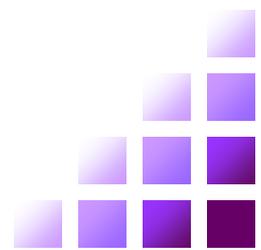
精神としてのフィールドワーク

—筑波大学人文地理学・地誌学教室の実践—



松井圭介・兼子 純(筑波大)

<http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~chicho/hrg/>





報告の趣旨

- ◆ 地理学におけるフィールドワークの重要性は論を待たないが、大学院のカリキュラムにおいてフィールドワークを正規の科目として設置している大学は少ない。

- ◆ 本発表では、前身校時代よりフィールドワークを大学院の正課教育として取り入れ、地域調査を学風としてきた筑波大学人文地理学・地誌学教室を事例として、
 - (1) 大塚地理学とフィールドワーク教育への関心
 - (2) フィールドワーク教育の実践
 - (3) フィールドワーク教育の課題と将来について私見を述べ、意見をいただきたい。



今、なぜフィールドワークか？

- ◆ 「地理学が地域の空間秩序を求め、その空間的特性(地域性)を解明するために、地域研究(フィールドワーク)を重視することは、大方の同意がえられるように思われる」(齋藤2006)
- ◆ 「フィールドワークを重視することは、一般性、法則性を求める姿勢と矛盾するものではない。しかし性急に「一般性」あるいは「法則的傾向」を求める学徒にとって、フィールドワークを重視することは、地域への埋没であると批判されフィールドワークを重視した研究は、おろそかにされる嫌いがある」(齋藤2006)

⇒「地理学はフィールドワークの成果を積み重ねて、その存在をアピールする時期」

田中啓爾・三沢勝衛・市川健夫・齋藤 功らの「文化層序論」



地理学論文にみるフィールドワーク

2003年 30本／65本 (46.2%) 聞き取り:25, アンケート:7, 観察:1

2004年 43本／74本 (58.2%)

2005年 51本／70本 (72.8%) 聞き取り:31, アンケート:17, 観察:5, 他:4

2006年 36本／71本 (50.7%) 聞き取り:25, アンケート:6, 観察:5

2007年 36本／60本 (60.0%) 聞き取り:35, アンケート:5, 観察:2

2008年 29本／50本 (58.0%) 聞き取り:13, アンケート:7, 観察:4, 他:6

2009年 25本／58本 (43.1%) 聞き取り:20, アンケート:6, 観察:6

2010年 28本／48本 (58.3%) 聞き取り:17, アンケート:4, 観察:3, 他:12

(『地理評』『人文地理』『経地年報』掲載論文による。手法はいずれも複数集計)

◆ 研究方法(の一部)にフィールドワークを用いている論文は約半数



フィールドワークの内容

- ◆ 聞き取り調査(最も基本的な手法)
 - 構造型の面接調査(質問紙利用): 農村系
 - 自治体など公的機関を対象
 - 特定の企業や個人を対象
- ◆ アンケート調査
 - 伝統的手法(郵送法・留置き法)
 - 新しい手法(メール法・web法)
- ◆ 景観観察
 - 土地利用調査



田林先生最終講義より(1)

「私は主にフィールドワークに基づいて、様々な課題について研究を行ってきた」

「視点」

- ◆ 土地資源をいかに活用しながら生活を成り立たせているのか
- ◆ 現地調査により土地利用図をつくり、地域の特徴を見つけることと土地勘を養うこと
- ◆ 経済活動の実態と歴史的推移を当事者から聞き取ること
- ◆ 就業の組み合わせで地域の特徴をみること
- ◆ (説明のために)記録や地図、史資料、統計などを集めること



田林先生最終講義より(2)

- ◆ 小地域の実証的研究では、イメージ作りが重要である。
⇒論文(研究)のストーリーを描くこと/聞き取り調査
- ◆ モデルとなった一つの農家で明らかになった景観と就業のデータについて、集落(地域)全体のものを集める。
⇒イメージを実証するためのデータ収集



地誌学と臨地教育：高師・文理大

◆『東京文理科大学閉学記念誌』(1955)

「大塚の学風は一つは或る地域を定めて一週間合宿滞在の上、学生各自にテーマを持たせて臨地研究を行うことである。(中略)臨地合宿指導を行うこと、而もそれを入学の初年即ち第一学年で実施すること、臨地前における諸準備・研究はもとよりであるが、合宿中に受ける厳しい指導と調査研究に対する訓練は本学独自のものである」

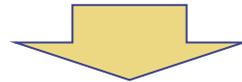


地誌学と臨地教育：高師・文理大

◆ 田中による徹底した臨地研究と教育実践

「足で打ち立てた地理学」(生野1975)

「巡検にはじまって、巡検に終わる」(三浦1975)



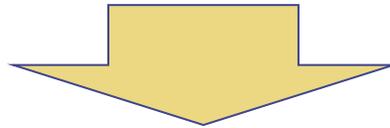
正課教育(1年次: 人文・地誌、2年次: 自然地理でそれぞれ進級論文、3年次卒業研究)

その他日帰り巡検の実施(1924東京高等師範学校地理学会、後の大塚地理学会)



地誌学と臨地教育：教育大へ

- ◆ 高師・文理大時代より、「フィールドワークに基づく実証主義的な地理学」としての学統の構築



東京教育大において体系化・強化

『東京教育大学地理学研究報告XXI』(1977)

「地理学教室のあゆみ」

終刊号(名誉教授2、教官14名執筆)



語られる「野外巡検」

◆ 人文地理学・地誌学の事例

浅香幸雄・奥野隆史・幸田清喜ら

◆ 自然地理学の事例

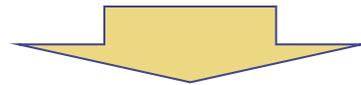
福井英一郎・市川正巳ら

⇒ 野外巡検の厳しさ、楽しさの回想と意義の強調
「野外観察の仕方は大塚学派の伝統であり、今後もこのよき伝統を継承して行かねばならない」(市川)



野外実験の歴史

- ◆ 野外調査の伝統: 高師・文理大・東教大
地理学研究の原点としての地域調査
地域生態論的研究



野外での調査体験を出発点として地域を
思考する学問的基盤 (大塚地理学の伝統)



大学院カリキュラム

◆ 野外実験

人文地理学・地誌学ほか各分野:M・D

地球環境科学(1単位):M

◆ 各分野の専門科目

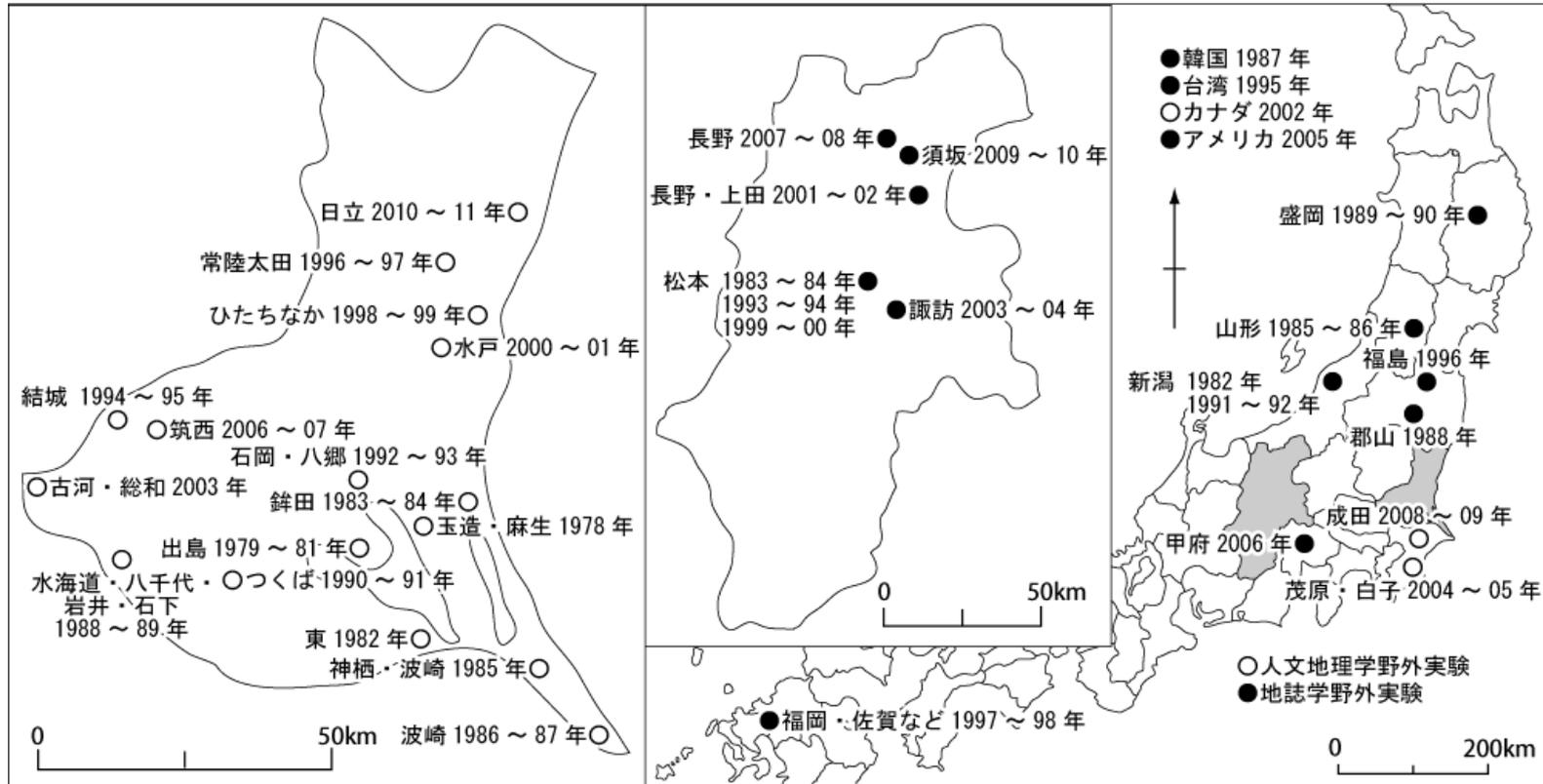
講義・演習・野外実験のセット:各3単位

◆ 履修状況(人文系)

人文地理学分野＋地誌学分野
＋空間情報科学分野で単位充足



実験場所



※地名は野外実験実施当時

人文地理学: 近隣地域 (霞ヶ浦周辺 ~ 茨城県内 ~ 千葉県)
 地誌学: 東北・信州・九州の主要都市および周辺地域



実験方法

◆2年連続同一のフィールド(各1週間)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
2008年	長野市		2年目調査	調査まとめ, 図表作成・執筆				入稿, 原稿修正		報告書完成		
				事前調査	1年目調査		調査まとめ	2年目調査準備				
2009年	成田市		2年目調査	調査まとめ, 図表作成・執筆				入稿, 原稿修正		報告書完成		
				事前調査	1年目調査		調査まとめ	2年目調査準備				
		須坂市										

人文地理学野外実験 地誌学野外実験

この他, 空間情報科学野外実験は毎年11月に3日間の日程で行われる。



実験方法

須坂市(2010年)→
地誌学野外実験参加者



◆ 調査形態と参加者

グループ調査を主体(人文)／個人＋グループ調査(地誌)

D1・2およびM1は原則参加(20～30人)

D3・M2が参加する場合もあり

◆ 時期

1年目: 秋(10月末) 2年目: 春(5月末)

2年目の年度末に報告書作成(『地域研究年報』2011年現在33号)

◆ 目的

筑波スタイルの構築: 地理学者(≡フィールドワーカー)の養成

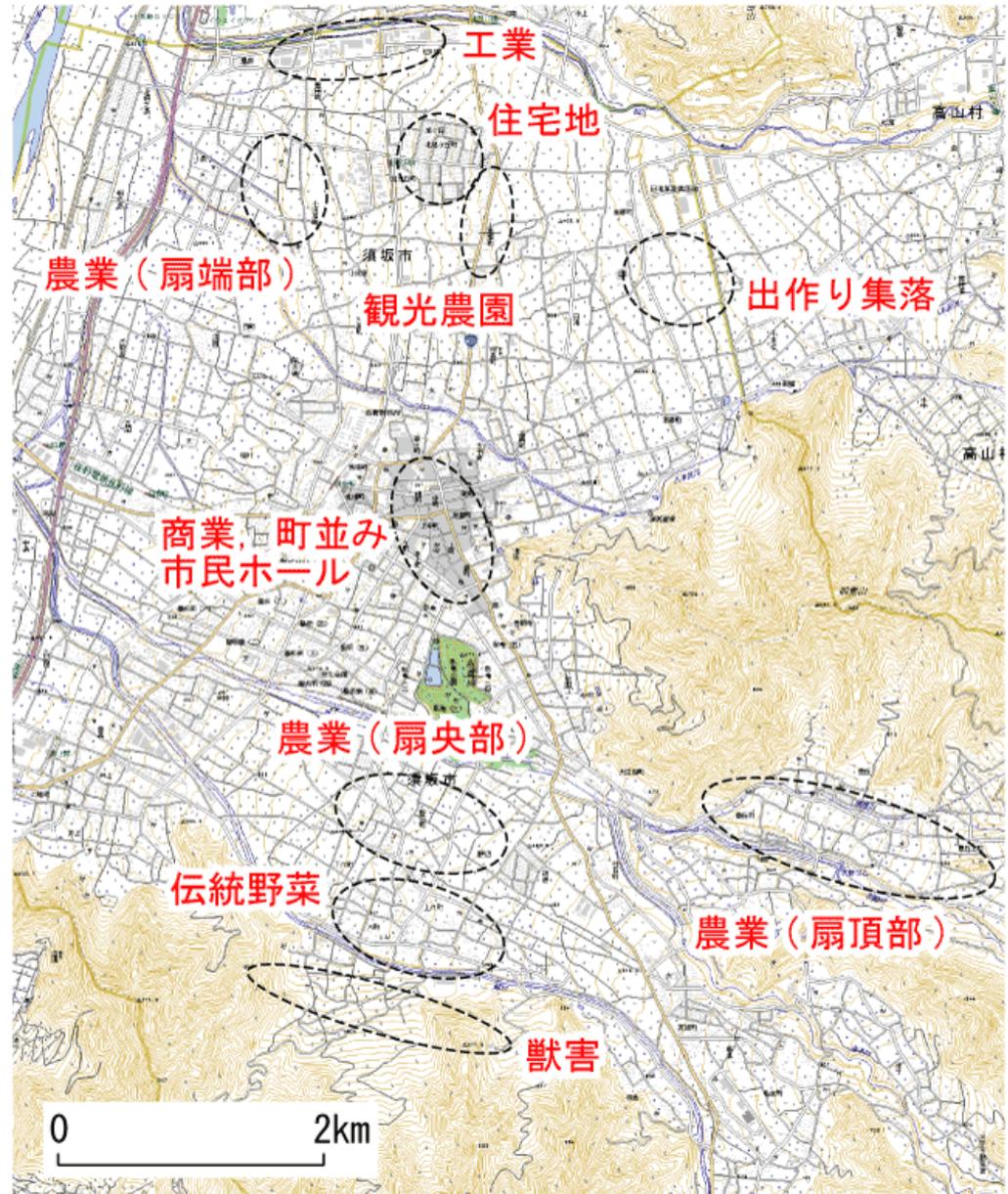
Keywords: 土地利用, 景観観察, 生産基盤, 地域生態…

→ 野外調査を出発点として地域を思考する学問的基盤の構築



調査地域の選定

主に、地誌学野外実験では実施場所として盆地を選定し、扇端部や扇頂部など異なる環境における人間と自然とのかかわり、人間活動を調査





実験の様子① 調査風景1

◆ジェネラルサーベイ



↑ 筑西市 (2007年)
住宅地調査班の説明風景

↓ 成田市 (2009年)
観光調査班の説明風景





実験の様子② 調査風景2

◆ 土地利用調査



↑ 須坂市 (2010年)
土地利用調査の風景



← 須坂市 (2010年)
農業調査班の
土地利用調査
下図

成田市 (2009年) →
農業調査班の
土地利用調査風景





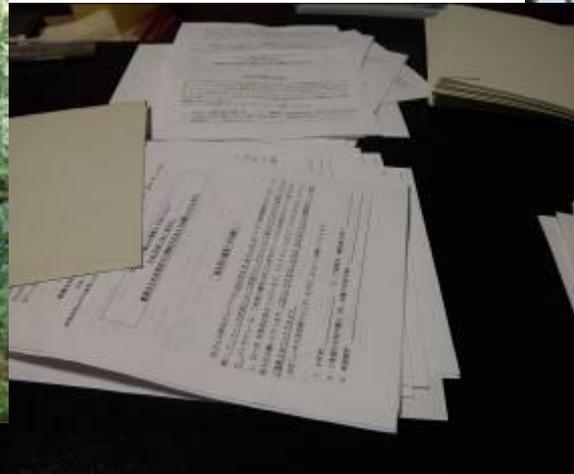
実験の様子③ 調査風景3

◆ 聞き取り調査

↓ 須坂市(2010年)
商業調査班調査票



↑ 日立市(2011年)
観光調査班



↑ 須坂市
(2010年)
農業調査班

須坂市→
(2010年)
住宅調査班



筑西市→
(2007年)
農業調査班





実験の様子④ 夜1

◆ゼミ



↑ 須坂市 (2010年)
地誌学野外実験におけるゼミ風景



↑ 成田市 (2009年)
人文地理学野外実験におけるゼミ風景



実験の様子⑤ 夜2

◆作業



↓ 須坂市 (2010年)
住宅調査班



↑ 筑西市 (2007年)
住宅調査班

↓ 成田市 (2009年)
農業調査班





実験の様子⑥ 夜3

◆ 懇親会



↑ 成田市 (2009年)
人文地理学野外実験にて



← 筑西市
(2007年)
人文地理学
野外実験にて



須坂市 (2009年) →
地誌学野外実験にて



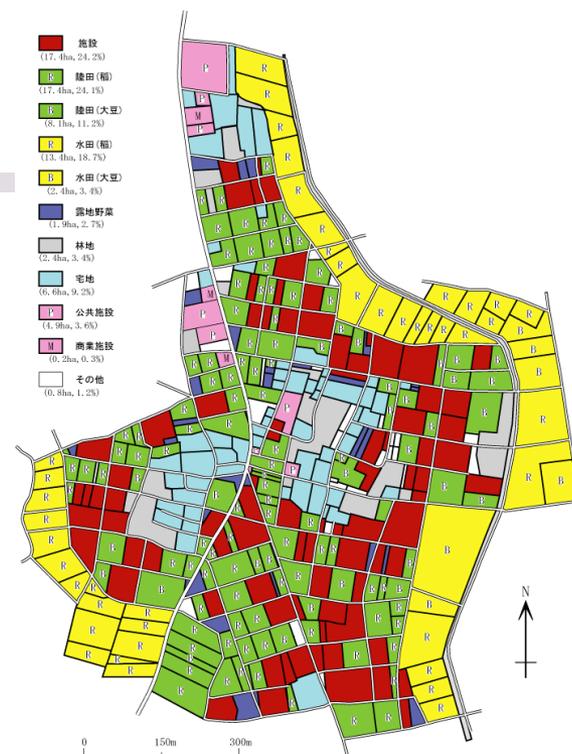
実験の成果①

◆ 土地利用図

筑西市 (2007年)
農村調査における土地利用図→

○ 土地利用図作成におけるデータベースの構築 (ArcGISを用いて)

1. 基盤地図情報を基図として、シェープファイルを作成
2. シェープファイルに、土地利用調査で得られた属性を分担して入力
3. 各人のデータを統合し、土地利用形態に応じて着色、あるいはパターンを作成
4. 統合されたデータは、Illustratorなどで加工、整形して各班の目的に応じて使用する
→ 基本となる地図を共同で作成、共有利用



須坂市 (2010年) 都市部調査における土地利用図の一部→



実験の成果③

◆学会発表の様子

筑西市(2006, 2007年)の
成果発表2008年日本地理学会
春季大会(独協大学)にて→



↓成田市(2008, 2009年)の
成果発表2009年人文地理学会
大会(名古屋大学)にて



◆学会誌掲載の例

林 琢也 2009. グローバル化に対応したリンゴ生産と品種の管理—日本ピンクレディー協会の取り組みを事例に—
茨城地理(10):19-27.

吉田国光・市川康夫・花木宏直・栗林 賢・武田周一郎・田林 明 2010. 大都市近郊における社会関係からみた稲作
農家の農地集積形態. 地学雑誌119(5):810-825.

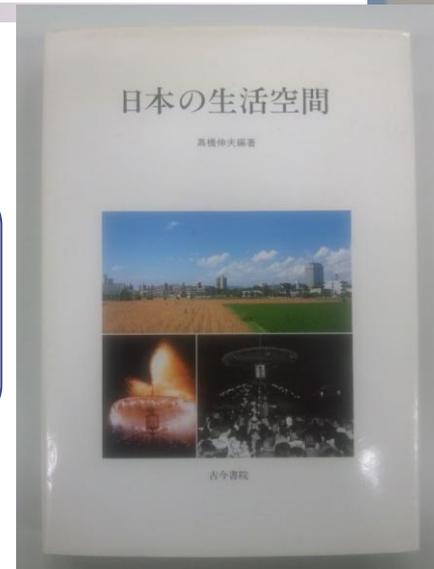
KUBO Tomoko, ONOZAWA Yasuko, HASHIMOTO Misao, HISHINUMA Yusuke and MATSUI Keisuke 2010.
Mixed Development in Sustainability of Suburban Neighborhoods: The Case of Narita New Town. Geographical
review of Japan series B.83.47-63.



実験の成果④

◆ 著書における成果

齋藤 功編 2006. 『中央日本における盆地の地域性—松本盆地の文化層序—』 古今書院.
 高橋伸夫編 1990. 『日本の生活空間』 古今書院.



◆ 地域との連携



○須坂市(2009, 2010年)
 須坂市, 市史編纂室との
 連携調査(写真左)

○茂原市(2005, 2006年)
 一宮市において調査内容
 を報告する講演会を実施
 (写真右)



フィールドワークの実態は？

◆「霞ヶ浦地域研究報告」の創刊(1979)

場所: 霞ヶ浦周辺地域

手法: 土地利用と景観

(理由) 人々が彼らの文化的伝統と現在の技術水準を背景として、与えられた自然的、場所的条件を評価し、場所を組織化し、特定の条件を資源化して、その理想の実現に努力している姿を具体的に示す」



地域生態論的な見方/地域性(さまざまな空間スケール)

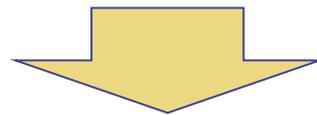


なぜ土地利用と景観？(1)

◆『霞ヶ浦研究』3号(1981年): 出島村調査

高度経済成長期以降大きく変貌する農村に焦点

「ミクロな地域の記載は地理学における伝統的な課題である。対象とする地域に存在する諸々の事象が相互に影響しあい、一つのまとまり(サブシステム)を構成するという予想に基づいて、諸事象を記述し、全体像を描き出すことを目指す」



特に強調する点がいくつか存在するのが常である



なぜ土地利用と景観？(2)

◆ 生態学的基礎とその変遷

立地位置と立地場所/歴史的変遷

◆ 生活行動

生活行動を発生させる生活機能(労働・生産、教育、消費、つきあい、再生産・休養、交通)

生活行動をとらえる枠組(時間的サイクル、空間的広がり)

◆ 生業パターン

資源基盤としての土地(土地利用、土地所有など)

土地利用パターン

農業生産/農業経営(組織)/漁業ほかの生業 など



フィールドワーク教育の目的

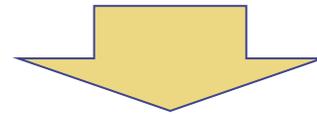
◆ (自立した) 地理学者の養成

一貫5年制に基づく研究者養成システム

地理学的なモノの見方・考え方養成の実践場

「5万分の1地形図とフィールドノート」

「どの地域でもどんなテーマでも(そして誰でも)」



(結果として) 数多くの地理学者を輩出してきた

筑波大学大学院出身者 約70名が大学に奉職



野外実験をめぐる変化

◆ テーマ設定

地誌的研究意識の稀薄化

(上級生の専門を活かした) テーマ主義

都市・社会・経済的なテーマの増加

◆ 論文志向の強化

「霞ヶ浦地域研究」から「地域調査報告」(1983年～)

「地域研究年報」(2005年～)へ

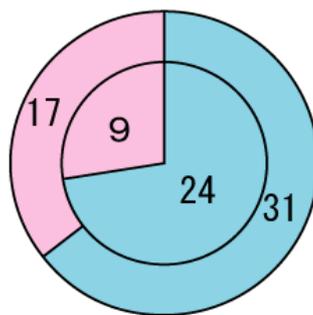
研究レビューの充実/地域の事実を記載する？



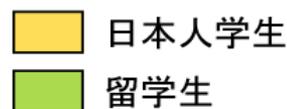
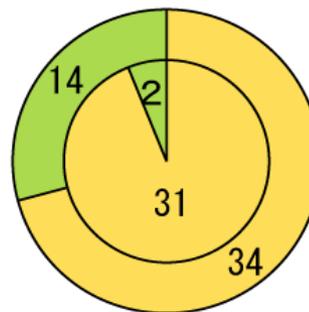
大学院教育をめぐる環境の変化

1) 大学院生数の増加

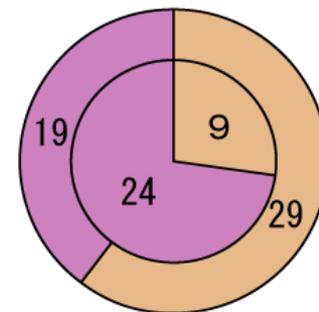
男女比率



留学生比率



修士 / 博士比率



大学院生の構成→
(2001年, 2011年)

単位: 人 内側円: 2001年 (n=33)
外側円: 2011年 (n=48)

2) 目的意識の変化

研究者養成から実務家養成へ

「教育の場」から「研究業績」の志向



大学院教育をめぐる環境の変化

◆ 大学院の質的・量的変化がもたらす影響

大学院進学者の目的意識の変化

キャリアデザインの多様化

学術動向の変化(人文/自然の乖離)

社会貢献の要請: 役に立つ?

人間関係の「ゆるやか化」

地理学未修者の増加(ベースとなる基礎学力)

言語能力の制約…

新しいツールに対応できない教員(自戒)



おわりに

◆ 野外実験の意義: 十分にある

教育的機能

研究者育成機能

学統の継承

◆ 大学院をめぐる環境変化への対応

運営方法の柔軟さ

安全安心マニュアル作成の必要性

「何を守り、何を改め、何を新しく始めるのか」